水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

1	この頃のかき氷かな持て余す 夏の食卓の救世主は梅干し。中七の「跳ぶ」と下五の「這う」が連係していて、ユーモアのある句。雨蛙と乳飲み子の動きを対比し、健やかな子の成長の願いがうかがい知れます。	松岡拓司	
2	雨蛙跳ぶや乳飲みの吾子が這う	蛍のまま	のり子 朝香 梗舟
3	冷索麺出汁まで啜る角の店	檜鼻ことは	
4	紫陽花は少年の歌ソの響き 「ソ」がちょうど少年ぽくっていいです。理屈のない、説明のない、詩です。	おじいちゃん一号	拓司 月を
5	妖艶なつや持つそれは新米だ	海広	
6	火鍋の前にはハンカチーフの染み	傘張り浪人	
7	孫の寝てかたへに送る団扇風 孫への心遣いがにじみ出ている。団扇風に載せる孫へのやさしさ。孫を見守る優しい視線が感じられる	安田蝸牛	素風 俳爺 薫風 風信子
8	古稀過ぎて１８きっぷや夏の空 生きてる限りは青春だ、の見本です。古希を過ぎて青春１８きっぷの旅を楽しまれるなんて、最高。ゆったりとした時間の中で、若い時には見えなかったものも見えたし、感じることができたでしょう。若さは年齢でなく気持ちの問題。爽やかな作者と夏の空が浮かんでくる。	森佳月	瞳人 マスミ 風子 風舎
9	帰省子の椅子一つ足す夕餉かな 帰りを待つ親の気持ちは皆同じですね。帰省した子の席は、父親の向かい側の母親の隣りに設う。手造りの調理は、子の好物ばかり、ビールも並び話は弾む。コロナ明けで暫くぶりの帰省、一人増えた孫、両親の笑顔。久しぶりに家族が揃った食卓、嬉しさが伝わってきます。帰省の子を迎えた喜びが伝わってきます。帰省子が加わって作者一家の楽しそうな夕餉が目に浮かぶ。都会に出ていて、あまり帰ってこない子供の思いがけない帰省をうまく描いている。親心を椅子一つに表して。帰省子は大学生、大袈裟な歓迎は必要でなく家族と食卓を囲むだけで十分。さりげなく読んでますが素晴らしい家族が想像出来ます。整ってます。帰省を心待ちにしている親の気持ちが表れています。	荒一葉	修 音思 俳爺 きいち 風信子 京子 六弦 ひろ志 暦文 ひろし ことは 暮風
10	厨入る前のひと梳き明け易し 朝食の準備に厨に向う前に髪をひと梳きする何気ない動作が夏場の日常を良く表しています。リアリティーとノスタルジーが感じられます。夏の明け方は目覚めも早い、身支度を整え清々しく新たな一日のスタートを切る。	ありぎりす	芳春 梗舟 拓司 みづる
11	睡蓮の葉に囲まれて花咲ける	大束暮風	
12	引き波に沈んで浮いて羊草	しーしー	
13	雨ひと夜たどる記憶や夏燕	新井のり子	
14	里海の帰漁の船に夕凪げる	破れ蓮	
15	字役のすててこ歩く昼餉時	高原ひろし	

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	楽 1号 田猫	香 風子	春 山菜	薫風	京子			暦文 凡士	修					
カサブランカ香に酔はされ又も観て	曝涼や曽祖父の句に我のこと	湿りたる天地を抱く蝉時雨	南よりモスラが来ます二重虹	水遊足りてをさなの午睡かな	星涼し全集並ぶ夫の書架	夜な夜なに雀蛾集ふ合歓の花	札の顔替はる七月三日かな	炎天の踏切警報鳴り止まず	風鈴の音色涼しむ京町家	梅雨晴や幼な草萌ゆ檜皮屋根	枇杷の実の熟れ時を知る鴉の眼	始発駅白シャツずらりスマホ打つ	杏ジャム煮詰めて雨の昼下り	数式に苦戦のかの日走馬燈
嬉しかったでしょうね。俳句を継がれたのですね。母の句にもあった。見直ししようと探した。幼い初ひ孫を抱いた詠嘆の句だろう。初孫の私にも実感できる。虫干しで発見されるとは。	自然界の摂理の面白さ、美しさを詠んでいて素晴らしい。中七の表現が秀逸。	二重虹とモスラの取り合わせ、美しい不思議な世界が見えました。山菜。怪虫モスラの登場である。モスラは二重虹を背負って幸せを運んできたのである。	遊び疲れた幼子が良く描かれている。	きっと全集はすっきりと並んでいるのでしょう。				炎天下の鳴り止まね警報器の音、イライラが募る。普段は感じないが、こんな猛暑はのなかでは句のとおり。	京町家の風鈴の音色を聞くと涼しそうに感ずる。					
瞳人	みづる	雪待月田猫	石関六弦	松田素風	くるみ	山川充	俳爺	本橋稀香	光雲2	秋谷風舎	丸山マスミ	和田イチ子	いさむ	青木鶴城

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
					俳爺 光雲2					佳月 風舎		喜夫	蝸牛 修 素風	
夏の風邪いつまで続く鬱気分	遠き日の思ひ出匙に欠き氷	初蝉の声ひそやかに延暦寺	トライアルの補聴器ときに蝉時雨	風鈴の音色誘ふ旅心	夏らしい景を切り取って涼しい。 半夏生沖に白帆の見え隠れ	日陰置く席に片寄る電車かな	梅雨の城石垣濡れて静まりぬ	合歓の花文殊菩薩の睫かな	炎昼や焼肉キムチホルモン屋	夾竹桃のような人は、どんな人物なのか想像させられる。 満面の笑みに毒あり夾竹桃	炎昼を焼肉キムチホルモン屋	父よ父よの訴えかけが心に響きます 蝉が鳴く父よ父よと蝉が鳴く	山に降る激しい夕立が良く表現されている。夕立で山路が突然かすんだ光景を詩的に表現。「けぶる白雨」が巧みである。 卒然と山路のけぶる白雨かな	梅雨の月梔子の香を包みけり
反町修	ひろ志	龍野ひろし	しんい	衛	幸子	小林土璃	孤舟	網野月を	河野凡士	立野音思	河野凡士	久美子	薫風	横井あらか

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
田猫	しんい 孤舟 風子 秀子						ゆりあ	荒一葉 マスミ 孤舟		六弦 のり子 マスミ 允孝 きいち	允孝	朝香 風信子		
宵花火散骨船は羽田沖 「宵」と「船」の組み合わせが涼しく、お別れが花火というのも美しい。	江戸文字の神輿半纏肩の瘤 神輿の似合う江戸っ子の心意気。江戸っ子のきっぷの良さを想う。江戸っ子の粋が生きている。祭の最高潮が伝わる。江戸文字が良い。	ひまわりや彼の地に届け我が祈り	五秒差で腹に響くや遠花火	雨上がり歓喜の歌や初蝉ら	猛暑日や指先で聴く己が脈	釣り人も木陰に座る炎天よ	宇宙の本借りて帰る子星祭り 戦没者碑でしょうか、同性の名の連なりを指でなぞる姿が痛々しい、八月は慰霊の月である。6月23日は沖縄戦で亡くなられた方の御霊を慰め、世界平和を祈念する日。平和の礎に刻銘された一族の方々の名を優しく撫でながらお参りする方々の思いが偲ばれる。夏とともに来る慰霊の日。	同姓の連なり撫づる手慰霊の日	ダンプ街道強し逞し野萱草	夏帽子ひとつ増えての里帰り 家族が増えた喜びが伝わる句です。時間軸の長さを増えた帽子で表現。少子化社会が危惧される昨今、里帰りにもう一人増えたのは、他人事でも嬉しい句。お子さんが一人増えたのでしょう。下五の里帰りがいいですね。さりげなく読んでおりますが、良いですね。お揃いの帽子目に浮かびます。	炎天や耳底に血の音聴こゆ 炎天では耳奥の血の動きが聴こえてきます。	友からの山の絵手紙風涼し 山の涼しい空気を絵手紙が運んで来てくれたようで、嬉しいですね。友人からたくさんの「暑中見舞」が届いたと解釈した。暑い日が続く中、炎天下のポストにたくさんの暑中見舞が届いていた。それらを前にして作者はふと風に涼しさを感じたのである。	炎昼や青信号まで陰宿り	梅雨明や軒に項垂る照る坊主
森下山菜	岡崎梗舟	朝香	新　暦文	絵夢	後藤允孝	総太郎	霜里	岡田芳春	渋谷きいち	伯男	ゆりあ	佐藤幹子	おじいちゃん1号	日高道を

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

61

荒一葉
怒忘
瞳人

初浴衣なんだか少し男前

初めての浴衣姿に緊張している様子が伝わる、男前になったかな。控えめのようで実は、を感じ、面白いです。パリッとのりの利いたやつ、男の心身を整えてくれます。

小林京子

62

夏休み釣った魚をバーベキュー

総太郎

63

火に油注ぐ猛暑の焼き魚

平野楽

64

行蔵は我がこと涼し南無大師

瞳人

65

荒一葉
稀香

文月や電子書籍で読む源氏

電子書籍と源氏物語の取り合わせが効いている、季語も的確。平安時代の源氏物語を現代は電子辞書で読むという面白さ。

羽島秀子

66

プールサイドを茶髪の選手闊歩する

つきいげ

67

音思

冷酒や酔へば止まらぬ国自慢

酒量とともにお国自慢のトーンの上る人、いますね。

染谷風子

68

長き夜の船橋（せんきょう）に立つ航海士

風信子

69

くるみ
光雲2

牛の子の潤む眼の涼しさよ

動物の子の潤んだような眼は引き込まれるほどきれいで確かに涼しさを感じます。

邦治

70

璃香舟菜
土稀梗山
幹子

早朝の駅のホームに火蛾を掃く

「早朝の」で景がくっきり立ち上がっている。一晩中駅舎の灯の周りを飛び回っていた火蛾が朝には骸になっている儚さ。時、場所、動きが鮮明に浮かび上がります。田舎の駅の駅長さん。早朝のホームでもスラの死骸を掃いていた。子どもさんは、遊んでいても急に寝てしまうことがあるものですね。可愛らしさが現れています。

おじいちゃん一号

71

志
ひろ月を
絵夢
秀子

昼寝の子パズルのピース持ちしまま

ジグソーパズルの途中で眠ってしまったのだろう、最後のワンピースか。アルバムにしておきたいような一句です。季語と措辞の合わせ方が巧み。幼子の手の中のパズルがよかった。

園子

72

地に揚羽弱りぶ厚き空の雲

石川順一

73

凡士

風死すや世上恐るるもしトラに

時事句は難しい、投句の時点から環境は大きく変わっている。

持永喜夫

74

つきいげ
月を

ぽつぽつと歩いて行こう梅雨夕焼

ことさら美しい夕焼けの中をのんびり歩いて帰る、という季語と中七下五の調和が心地よい。座五の季語「梅雨夕焼」にノスタルジーを感じます。

蛍のまま

75

錯覚のようにちょうちょが指に着く

松岡拓司

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

76	定食屋ワンオペの夜扇風機		太田怒忘
77	頭寄せ眠る姉妹やさくらんぼ 柄のふたつながっているさくらんぼ。	総太郎 しーしー	檜鼻ことは
78	西向きて黙祷するは慰霊の日 絵画的な作品である。「真帆片帆」という措辞が素晴らしい。とても明るい海が表現されています。真帆片帆が素敵な言葉ですね。		傘張り浪人
79	江の島の海にヨットの真帆片帆	素風 破れ蓮 幹子	安田蝸牛
80	ぎりぎりの夏の勝負だアイス棒		海広
81	蟇蛙無粋無愛想無頼漢 嫌な生き物に託けて自嘲している句とも好きな生き物に向けてツンデレしている句とも読めて面白いです。	あらか	荒一葉
82	草笛や遠く手を振る毛馬堤 毛馬堤は蕪村の「春風馬堤曲」の舞台である。藪入の娘を遠くで待つのは田舎の母である。うれしいねえ。	山菜	ありぎりす
83	道端に青柿ひとつ上を見る 在り得ないものがあることに気づき、青柿ひとつで今後の世の移ろいは如何にと考えさせられました。	喜夫	森佳月
84	去年の葉を突き破り立つ花蓮		しーしー
85	一列に人道橋渡る烏の子		新井のり子
86	路傍にも色香愛でたき夏の花		大束暮風
87	老鶯や母屋出払ふ宮参り トレヴイの泉？戻らぬ時間はなぜあれほど切なく美しいのか、「落ちゆく」が際立つ。		高原ひろし
88	水底へリラ貨落ちゆく遠い夏 軽快な感じがいいと思います。句の思い付きが良い。「起居の軽き」が良い。この猛暑にスーツなど着てられません。甚平に着替えてホッと一息している作者が浮かぶ。寛いだ夏座敷が表現されている。如何にも涼気を感じる	みづる 伯男 ゆりあ	瞳人
89	甚平に着替へて起居の軽きかな	風舟牛 暮香風 孤稀士 蝸薫凡	破れ蓮
90	魔女いるや呪いのような汗を拭き		雪待月田猫

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

91		夏をどり奈良漬にほふ宿場町	みづる
		情景が浮かんできます。興奮の続くプールが見える。熱冷めやらぬプールが表現されている。競技の後の余韻を上手く捉えている。	
92	ひろし 暮風 蝸牛 破れ蓮 絵夢	激戦のプールに波の静まらず	松田素風
93	つきいげ	執着を洗ひ流せる夕立かな	石関六弦
		最近の豪雨のような夕立なら思いをも洗い流せると納得した。	
94		「やまおやじ」青葉掲げて仁王立ち	山川充
		ミラーボールの華やかさと汗との対比。ミラーボールと汗がダンスホールの熱気を伝える。	
95	しーしー	ダンサーのミラーボールに光る汗	俳爺
96	土璃 ことは 芳春 秀子	ぞろぞろと蟻ＡＩの読むニュース	くるみ
		「ぞろぞろと蟻」の不穏感がいい。未来への言いようのない不安を暗示する。ＡＩの読むニュース、たしかにこのような感覚で聞いていました。どこか違和感のあるＡＩの読み方、気持ち悪さを蟻に寄せてみたと読みました。新鮮です。	
97		独奏（ソロ）で鳴き後に合奏蝉しぐれ	光雲２
98	允孝 みづる	袋がけ赤子のごとき青葡萄	秋谷風舎
		大事に大事に育てる様子が、この袋に込められています。やっと可愛らしい実をつけた丹精の葡萄、我が子を見るように甘く大きく立派に成長することを願う。	
99	ことは	草野球夏野に場外ホームラン	本橋稀香
		清々しい一発ですね。	
100		梅雨入りや洗濯物と我もいて	和田イチ子
		わがうぶな頃をにわかに思い出されて赤くなり。胸キュン！夏休みの中学生かなあ。	
101	瞳人 のり子	初デート俯きかげんソーダ水	いさむ
102	1号	行行子止めさしたるあの台詞	丸山マスミ
		どんな台詞だったのか興味深い。「行行子」を学んだ。	
103	佳月 喜夫	病葉や信のなからば国沈む	反町修
		「信がない」人も国も見捨てられて沈んでゆく、今の日本ですか？病葉が悲しすぎます。	
104		雨音にめざめ大輪百合の花	ひろ志
105	しんい	旧式の愛車の走りカブト虫	青木鶴城
		フォルクスワーゲン社の車が懐かしい。	

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120
	佳月 田猫		しーしー		伯男	怒忘 総太郎				光雲2		くるみ	しんい 破れ蓮	
世の性を背負ってでむし思案中	花火消え運河に戻るネオンかな 花火のため消灯したネオンが戻ると同時に、花火大会という夢の世界は終わり、現実に戻る表現が秀一。	靴紐を結び炎暑の街中へ	異邦人母も娘もサングラス 「母も」がいいですね。	白き道帰り麦茶を一気飲み	鷺草をこよなく愛でし妹遠く 気持ち伝わります。	つひに吾男日傘の人となり それでもたぶんパイオニア。今年の暑さで私も日傘さしてます。共感しました。	半夏生出さぬ文いる夫婦函	つひに吾男日傘の人となり	ありません2個目の俳句はありません	照りかへす日射し眩しや蝉の声	戸口にて冷気と暑気が渦を巻き	凌霄花や百年前の母生家 どっしりと立派な家屋を想像しました。	昂然と海にそばだつ雲の峰 青い海に勢いのある入道雲。「昂然と」が良く効いている。	亡き母の愛でし白百合咲き初むる
しんい	衛	龍野ひろし	小林土璃	孤舟	幸子	河野凡士	網野月を	河野凡士	久美子	立野音思	横井あらか	森下山菜	薫風	朝香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135
		ひろし くるみ 総太郎 ゆりあ							暦文			楽 拓司			
	ピン札で払う丑の日初デート	キャンプの火が消えた後の上高地の静寂を感じました。 キャンプの火消えて星降る上高地	ご飯よと母さんの声夕焼空	薔薇の前写真撮りあうメイド服	炎天のロボやギクシャク高速指示	おほなゐの迫りをるらし心太	ＪＡの帽子の鍔を零るる夏の露	梅干しを頼りに終える酷暑の膳	人望有る方、星になっても輝いている。 きのふまで生きゐし人や早星	友からの山の絵手紙風涼し	夏山にヤッホウ預け踏み出しぬ	まいりました。私にとっては名句です。人の視線が無化されている清々しさが好きです。 限界の村に陽は差し枇杷熟るる	墓清掃延び延びにして秋涼し	薔薇の前写真撮りあうメイド服	野良猫の黒より白の涼しかな
	新暦文	岡崎梗舟	後藤允孝	総太郎	絵夢	岡田芳春	渋谷きいち	霜里	ゆりあ	佐藤幹子	伯男	日髙道を	じいちゃん1	総太郎	小林京子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年七月

136

楽
怒忘
ひろ志
あらか

蜜豆や惚気話を聞いてやる

季語がきいています。「聞いてやる」に読み手の居方が表れていて、面白いです。蜜豆より甘いおノロけ、割勘ではないでしょうね。惚気話に食傷しつつも友の幸せを喜んでいるのに違いないと思いました。さぞかし甘い蜜豆だったことでしょう。

小林京子

137

鎌倉の頼朝の墓草茂る

羽島秀子

138

アスファルトに時折震へ大揚羽

つきいげ

139

六弦

夏空へ拳を突かむ仁王像

暑さを吹き飛ばす勢いがある句ですね。

瞳人

140

璃
土
1号
芳春
きいち
風舎

涼しさや鍛冶屋が研ぎし妻の出刃

「妻の出刃」がいい。職人気質と円満な家庭を連想させる。涼しさを通り越してる？刃物の冷たさが、鍛冶屋と妻の登場でリアル感が増し面白さが加わりました。お見事です。妻に研いた刃物は危険、涼しくなります、その後笑いも、面白いです。かかあ天下のご家庭が想像される。（今朝、赤十字病院に入院しました。）

風信子

141

つきいげ

日盛りや林に籠る牛の群れ

放牧の実際を知らない自分にはない発想だった。

邦治

142

京子

湯上がりの越中ひとつ冷し酒

染谷風子

143

思
夢子
音
絵
幹
男
伯

駄菓子屋は子らの社交場夏休み

長い夏休みは退屈することもありますから、子供達にとって駄菓子屋は行ってみようかという場所ですね。そして、路地でメンコ・ビー玉夕暮れまで。昭和に共感。夏休みに入り、子ども達の社交場は賑わうことでしょうね。そして子どもなりのお付き合いのルールなどを身につけるのですね。子供のころ思い出します。

園子

144

雲の峰先導される自転車に

石川順一

145

あらか

早朝の駅のホームに火蛾を掃く

昨夜まで生きていたものが今朝はゴミとして無造作に扱われる無常観にひやりとさせられます。

小林陸人

146

まつりごと海霧（じり）に隠れる派閥かな

持永喜夫

147

148

149

150